

日蓮大聖人御書全集

あぶつぼうごしよ

阿仏房御書

ほうとうごしよ

（宝塔御書）

新版
1732
ゝ
1733

あぶつぼうごしよ ほうとうごしよ

阿仏房御書（宝塔御書）

けんじ ねん がつ にち あぶつぼう

建治 2 年（'76） 3 月 13 日＊ 阿仏房

おんふみくわ ひけん そうら お ほうとう

御文委しく披見いたし候い畢わんぬ。そもそも宝塔の

ごくよう もの ぜにいつかんもん はくまい 品々 贈 もの 確

御供養の物、銭一貫文・白米・しなじなおくり物、たしか

受 取 そうら お おもむき ごほんぞん ほけきよう

にうけとり候い畢わんぬ。この趣、御本尊・法華経にも

懇 もう あ そうろう みこころ 安 思 そうら

ねんごろに申し上げ候。御心やすくおぼしめし候え。

いち おんふみ い たほうによらいゆげん ほうとう なにごと あらわ たも

一、御文に云わく「多宝如来涌現の宝塔、何事を表し給

うんぬん

うや」と云々。

ほうもん だいじ ほうとう 判

てんだいだいし

この法門ゆゆしき大事なり。宝塔をことわるに、天台大師、

もんぐ　はち　しゃく　たま　とき　しょうぜん　きご　にじゅう　ほうとう
文句の八に釈し給いし時、証前・起後の二重の宝塔あり。

しょうぜん　しゃくもん　きご　ほんもん　へいとう　しゃくもん

証前は迹門、起後は本門なり。あるいはまた、閉塔は迹門、

かいとう　ほんもん　すなわ　きょうち　にほう　繁

開塔は本門、これ即ち境智の二法なり。しげきゆえにこれ

せん　さんしゅう　しょうもん　ほけきよう　きた　こしん

をおく。詮ずるところ、三周の声聞、法華經に來つて己心

ほうとう　み

の宝塔を見るといふことなり。

いま　にちれん　でしだんな

今、日蓮が弟子檀那、またまたかくのごとし。

まつぼう　い　ほけきよう　たも　なんによ　姿　ほか　ほうとう

末法に入つて法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔

きせん　じょうげ　選

なきなり。もししからば、貴賤上下をえらばず、

なんみようほうれんげきよう　唱　わ　みほうとう　わ　み

南無妙法蓮華經となうるものは、我が身宝塔にして我が身

たほうによらい

みようほうれんげきよう

ほか ほうとう

また多宝如来なり。妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。

ほけきよう だいもく ほうとう

ほうとう なんみようほうれんげきよう

法華經の題目、宝塔なり。宝塔また南無妙法蓮華經なり。

いま あぶつしようにん いっしん ち すい か ふう くらう ごだい

今、阿仏上人の一身は地・水・火・風・空の五大なり。

ごだい だいもく ごじ

この五大は題目の五字なり。

あぶつぼう

ほうとう

ほうとう

あぶつぼう

しかれば、阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、こ

ほか さいかくむやく

もん しん かい じよう しん しゃ ざん しつぼう

れより外の才覚無益なり。聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝

巖

ほうとう

たほうによらい

ほうとう

くよう

たも

をもつてかざりたる宝塔なり。多宝如来の宝塔を供養し給う

思

そうら

わ み

くよう

たま

わ

かとおもえば、さにては候わず、我が身を供養し給う。我が

み さんじんそくいち ほんがく によらい

身また三身即一の本覺の如来なり。

しん たま

なんみようほうれんげきよう

とな たま

かく信じ給いて南無妙法蓮華經と唱え給え。ここさながら

ほうとう

じゅうしよ

きよう

い

ほけきよう

と

ところあ

宝塔の住処なり。經に云わく「法華經を説く処有らば、

わ

ほうとう

まえ

ゆげん

我がこの宝塔その前に涌現す」とは、これなり。

有

難

そうら

ほうとう

書

顕

あまりにありがたく候えば、宝塔をかきあらわしまいら

そうろう

こ

讓

しんじんごうじよう

せ候ぞ。子にあらずんば、ゆずることなかれ。信心強盛

もの

み

しゅつせ

ほんかい

の者にあらずんば、見することなかれ。出世の本懐とは、

これなり。

あぶつほう

ほつこく

どうし

もう

じようぎよう

阿仏房しかしながら北国の導師とも申しつべし。淨行

ぼさつ生

変

たま

にちれん

おん

訪

たも

ふしぎ

菩薩うまかわり給いてや、日蓮を御とぶらい給うか。不思議

ふしぎ

おんこころざし

にちれん

知

じようぎよう

なり、不思議なり。この御志をば日蓮はしらず、上行

ぼさつ

ごしゅつげん

ちから

任

そうろう

べつ

ゆえ

菩薩の御出現の力にまかせたてまつり候ぞ。別の故はあ

ほうとう

ふうふ

拝

るべからず、あるべからず。宝塔をば夫婦ひそかにおがま

たま

くわ

もう

そうろう

きようきようきんげん

せ給え。委しくはまたまた申すべく候。恐々謹言。

さんがつじゅうさんにち

にちれん

かおう

三月十三日

日蓮

花押

あぶつぼうしようにんのもと

阿仏房上人所へ